みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　4月　30日　　NO.13

流氷の上の学校

　今日は、昔話です。

　「どうしても先生になりたい」と何度も教員採用試験を受けては、残念な結果に終わっていた頃のこと。

　NO.11で紹介した関東出身のうどんに醤油をどばどばとかける友人と苦しんでいました。彼は、高校の国語の教員を目指していました。

　ある日、ふといい考えが浮かび、思いつくままその友人に話をしました。

　「おい、京都や大阪の教員採用試験は、倍率高いけど、北海道ならまだ可能性あるんちゃうか」。

　友人は、すぐに話に乗ってきました。

　二人で北海道へ。教員採用試験の旅です。

　友人とは試験会場が違ったので、札幌駅で別れたと思います。

　この北海道での試験、私にしては、すごくできたのです。「詩人、高村幸太郎の父親の名前と代表作は」なんて今でも問題を覚えているぐらい。

論述形式の社会の問題も得意分野が問題になって、もう合格するしかない雰囲気が満ち溢れてきました。

　最後に面接試験です。

　集団面接では、グル－プの司会役をして、大活躍。

　そして、最後の個人面接。三人の面接官がにこやかに迎えてくれました。

　「テストがよくできていた」とか「集団面接では、みんなをよくまとめていた」とか誉め言葉のオンパレ－ド。最後の質問は、「北海道は、離島もありますが、そちらに赴任してもらえますか」と来たので、「喜んで。たとえ流氷の上でも行かせてもらいます」と返しました。試験会場が一瞬でそれこそ氷のように冷たくなっていました。試験官が目をきょろきょろさせていました。

　「流氷の上には、学校、ありません」と言われて面接が終わりました。

　私の結果は、当然‥‥。友人は合格しました。今も真冬に流氷がやってくる町で高校生に国語を教えています。